

ポール・クローデルの見た 1920 年代のフランス領インドシナ

根岸 徹郎

はじめに

今夏の調査旅行では、かつてフランス第三共和国の植民地だったラオス、ベトナムの二国を訪問する、貴重な機会を得た。立ち寄ったそれぞれの国や街では、すでにフランス語は話されていないものの、旧宗主国の影響はあちらこちらに、さまざまな形で残っているのが印象的だった。たとえば建物の様式、通りに命名するやり方、住所番号の振り方（通りの片側に奇数、逆側に偶数）などは、明らかにフランス植民地時代の名残りだと思われた。また、ベトナムの教会では現地の司祭がフランス語を話し、宣教師会の活動の痕跡を留めていると感じられるケースもあった。あるいは、わたしたちが訪問したコンツムの刑務所は、いわばフランス支配の負の遺産として保存され、旅程の最後に訪れたダナンは、フランスがインドシナ半島に侵攻する際の最初の攻略地のひとつとして知られている。

以下、本稿ではこういった現地での印象からスタートしつつ、それでは 1885 年の天津条約から本格化した第三共和国のインドシナ半島における植民地経営が、20 世紀の初頭にはどういった状況にあったのかという問いに対して、ひとりの外交官のフランス領インドシナ滞在報告書を基にしながら、検証してみたい。

1. 詩人大使クローデルと「わたしのインドシナ旅行」

「わたしのインドシナ旅行 (*Mon voyage en Indochine*)」(以下、本文では「インドシナ旅行」と略記し、そこからの引用はガリマール社によるクローデル全集第4巻¹のページを記載する)——これが、今回ここで取り上げるテキストのタイトルである。書いたのは、ポール・クローデル (Paul Claudel, 1868-1955) という外交官である。彼はまた、フランス文学史に名を留める詩人、劇作家で、後にアカデミー・フランセーズ会員に推挙され、また敬虔なカトリック信者でもあった。姉は彫刻家オーギュスト・ロダンの弟子かつ愛人だったカミーユ・クローデルで、今日、日本ではおそらく彼女の名の方がよく知られているだろう。

クローデルは 1921 年から 27 年、すなわち大正の末まで(大正天皇の大喪儀に出席したあと、

¹ Paul Claudel, « Mon voyage en Indochine », *Œuvres complètes de Paul Claudel* tome IV, Gallimard, 1952, p. 332-344.

次の任地であるワシントンに向けて旅立っている) 駐日フランス大使として東京に赴任し、新聞紙上で「詩人大使」や「ク大使」と呼ばれて親しまれていた。ちなみに、1923年9月の関東大震災の際は、当時、雉橋付近(現在の東京国立近代美術館の裏手)にあったフランス大使館で罹災し、その際の見聞を「炎の街を横切って」と題する一種のルポルタージュの中に書き残している。

彼は1890年、外交官試験に首席で合格すると、1893年からアメリカに勤務した後、1895年から1909年まで中国に赴任し、本国外務省ではアジア情勢に通じた通商関係の専門家として知られていた。第一次世界大戦後の1919年にヴェルサイユ体制が始まり、第四次ブリアン内閣の宥和外交政策がスタートすると同時に、クローデルが駐日フランス大使として任命された事情は、「ワシントンで戦後の極東新秩序形成のための会議が始まろうとする中、フランスの旧来からの中国中心の極東政策から日本中心の政策への転換を確固たるものにしようとするケ・ドルセ(ブリアン=ベルトロ路線)の正に切り札的人事だった」²と理解できる。この時期、とりわけ日本とフランスの間で問題となっていたのは、フランス領インドシナの関税問題だった。つまり、フランスと日本との間では1907年に日仏協約が結ばれていたものの、同化政策(assimilation)によって守られていたフランス領インドシナが日仏通商条約の対象に含まれていなかったことから、日本はフランス領インドシナに対する最恵国待遇が得られず、結果として、このフランスの植民地はコメなどの特産品について日本に最高率の関税をかけ続け、その改善を日本側が強く求めていたのである。巨大でありながらも政治情勢の不安定な中国ではなく、列強の中に新たに参入してきた日本を軸にアジアでの地位を確保しようとするフランスにとって、日本との摩擦は避けたいとする外交的な立場と、保護政策によって植民地の利益を守り、そこから収益を得ることで第一次世界大戦によって疲弊した本国の経済を立て直す足がかりにしたいとする切迫した事情との間での微妙な交渉が、東アジアの事情に通じた新任の駐日大使に課せられた使命だった。

こうした課題の解決に向けて、赴任の途上にクローデルはまずフランス領インドシナに立ち寄り、モーリス・ロン総督や商工会議所関係者と直接に会って、状況の把握に努めたのである。日記の記述によれば、1921年9月2日にマルセイユを発ったクローデルは同月29日に南部のサイゴンに到着、その後、中部の古都ユエなどを訪れながら北上し、10月24日に北部の中心地ハノイに入っている。この間、10月初めには調査が始まったばかりのアンコール・ワットを数日かけて訪問しているが、ここでの体験は詩人クローデルにインスピレーションを与え、後にいくつかの文学作品の中に結実している。こうして、各地で詳細な実地調査を行ったあと、最終的に11月7日にハノイを離れ、香港、上海経由で11月17日に日本に到着している。「イ

² 篠永宣孝、「駐日大使クローデルとフランスの極東政策」、『早稲田政治経済学雑誌』368号、2007年、p. 8.

「インドシナ旅行」はこうしたおよそ二ヶ月におよぶフランス領インドシナ滞在の半ば公式のレポートであり、日本着任直後の 1921 年 12 月 1 日に書き上げられ、フランス外務省に送られているが、長文のものにも関わらず短い時間で準備されたことから、フランス領インドシナと日本をめぐる問題がいかに重要視されていたかが窺える。

この報告書はあくまで予備調査ということもあり、ここでの記述は明確な結論を出すものではなく、まず状況の観察と把握に徹している観がある。けれどもこの点で却って、このレポートは当時のフランス領インドシナの状況を客観的に伝えてくれている。また、クローデルは中国勤務時代の 1903 年にフランス領インドシナを視察した経験があったことから、初期の植民地経営との比較も含め、今後の交渉を見据えた上での実地検分はきわめて具体的かつ細部に及んでいることが、この報告書から窺える。

2. 報告書の内容と特色

「インドシナ旅行」は、現地の政治的な状況の指摘から始まっている。ここでクローデルは他の地域と比べつつ、フランス領インドシナの治安状態がいかに安定しているかを強調している。つまり、それまで通過してきたエジプトやインド、シンガポールなどでは、イギリスやオランダに対する激しい民族運動がいたるところで見られたのに対して、「インドシナのもっとも驚くべき、そして特異なことは、その完璧なまでの静寂さであり、それがこのイメージを形成している。〔中略〕われわれはサイゴンに到着したが、そこにはもはや何も起きていなかった」（「インドシナ旅行」 p. 332-333.）³。そして、「世界はかつてなかったような商業的、経済的危機に瀕している。インドシナは日々、求められている以上のコメを、想像しがたいほど高騰した価格で販売している。アジア全体が、ヨーロッパによる搾取にうんざりしているか、あるいは少なくとも、ヨーロッパに対してアジアを決起させようとする政治家たちによって、動揺している。しかるにインドシナは、現地のものや人とヨーロッパのものや人との間に、かつてなかったほどの親密さと平和が共存している」（「インドシナ旅行」 p. 333.）と報告している。その要因としてクローデルが挙げるのは、フランスが第一次世界大戦の間、インドシナを戦乱から守ったという点であり、そのおかげでコメの生産が向上し続けているというのである。

コメの次にクローデルが取り上げているのは、ホンゲイを中心とした石炭生産に関する状況である。そこでは現在 80 万トンの生産だが、目下増産中であり、三年後には 130 万トンに達

³ もちろん、こうした平穏状態は表面上のものにすぎない。後述するアルベール・サローはフランス領インドシナ総督時代に何度か暗殺未遂を経験し、またクローデルの尽力で来日を果たしたメルラン総督も日本からの帰路、広東で暗殺されそうになっている。

すると報告している（「インドシナ旅行」 p. 335.）。また、新たな開発を含め、さまざまな鉱業（鉛、亜鉛、金など）の状況、そして増設中のセメント工場の増産予定、綿や絹といったテキスタイル関連、香水工場の状況など、主として農業以外の産業についてのレポートがこれに続く（「インドシナ旅行」 p. 335-336.）。このように、この報告書では、最初に主要な生産品に関する概況が指摘されているが、ここからはコメと石炭がフランス領インドシナにおける当時の最も重要な生産品であったことが窺える。

こうした報告に続き、クローデルが取り上げるのは、この植民地における宗主国フランスの役割である。「フランスは土地に対して気を遣っているのと同じく、そこを耕す者たちに対しても配慮している」（「インドシナ旅行」 p. 336.）とした上で、「医療事業の発展ぶりは、今回の視察旅行でもっともわたしを驚かせたものである」（「インドシナ旅行」 p. 336.）とクローデルは書く。その上で、「インドシナにおけるフランスが作り出した大きな成果は、具体的には、さまざまなものを近づけ、ひとつに結びつけたという点にある」（「インドシナ旅行」 p. 336.）と指摘している。そこでは半島の南北間、あるいは東西間の地政学的な結びつきを、フランスが道路網や鉄道網の整備によって作り出したことが強調されている。とくにクローデルは車による移動、交流の活性化に注目し、「わたしは車でサイゴンからプノンペンまで五時間で行くことができた。渡し船を何度も使わなくてはならず、また時期が悪いにもかかわらず、アンナン全体を二日で横断したのだ」（「インドシナ旅行」 p. 337.）と報告し、さらにラオスとの車による交通網も間もなく完成すると付け加えている。

けれども、クローデルがさらに強く指摘するのは、こうした物質的な結びつきよりも、フランスがもたらした、人間同士の精神的な結びつきである——「フランスとアンナンという、人種的にも風習や文化の点でもこれほど大きく異なったふたつの民族の間で、どうすれば支配と服従という関係ではなく、誠実な協力の精神を造り上げることができるだろう」（「インドシナ旅行」 p. 338.）とクローデルは問い、「今日、中国文化がかつてのような役割を担うことができない以上、〔中略〕その立場に立つのはわれわれである」（「インドシナ旅行」 p. 338-339.）とする。そのために重要なのは教育であり、漢字からヨーロッパ文字への移行であり、フランス語の修得である。こうして「フランス語は経済や文化活動の言葉となっている」状況の中、「サイゴンやハノイで建設された中高等教育機関は生徒であふれかえっていて、毎年、施設を拡充しなくてはならない」（「インドシナ旅行」 p. 339.）と報告書は指摘している。こうした成果は、ポール・ボーを筆頭とした歴代のインドシナ総督の尽力によるところが大きいことを確認した上で、クローデルはさらに極東学院（L'École d'Extrême-Orient）の研究活動や、大学などの高等教育機関の役割にも言及し、フランス文化の普及活動、広報活動が今後いっそう必要であり、その結果、フランスとフランス文化の感化を受けた現地の人間とは協力しながらこ

の地を発展させていくのだ、と強調している（「インドシナ旅行」 p. 339.）。

報告書はこのあと、モーリス・ロン総督以下、クローデルがハノイやトンキンで会って意見を交わしたパスキエやロバン、コニャックといった要人たちについて言及した上で（「インドシナ旅行」 p. 342-344.）、現状をなおいっそう改善する余地があることを確認し、最後に「インドシナは今後、イギリスのドミニオンの役割を、極東や太平洋における政治情勢の中で、果たさなくてはならない。ここはこれまで、外国人たちからだけでなく、本国からも、さらにとりわけ隣接する諸国からあまりに孤立し、無視され、忘れ去られてきた。けれども、ワシントン会議が、インドシナにとっての新たな時代の幕開けになることを願おう。われわれはその莫大な資源、驚くべき戦略上の好条件、軍事的可能性に、突然に気が付いたのだ。列強が一斉にアジアの命運を決定しようというとき、フランスがそこで発言できるのは、インドシナのおかげであり、[中略]したがって、インドシナがわれわれの極東における外交政策と次第に緊密に結びつき、よるこんで協力し合いながら、さまざまな外交施設や領事館と継続して接触を持ち、インドシナの利益がフランスの利益と混在することなく、反発しあうこともなく、重なり合うことが望ましい」（「インドシナ旅行」 p. 344.）と結んでいる。

3. 外交官クローデルのポジションとその視点

ここまで、クローデルのおよそ二ヶ月に及ぶフランス領インドシナ滞在の報告書の概要を順に見てきた。ここから浮かび上がってくるポイントは、大きく三つある。まず、一次産品を中心とした食糧や鉱物資源を産出する場としての植民地の現状と重要性、およびそれに従事する現地労働者へのケアの体制。次に、入植したフランス人と現地の人間との協調関係の構築の必要性。そして最後に、植民地を運営することによって現地の人々を文明的により高い次元へと導いていくという、宗主国フランスの使命の確認である。今日の視点からすれば、このレポートはあまりに素朴で楽観的だと言わざるを得ない点⁴が多々あるものの、懸案の関税問題とその背後にある日仏間の条約改正問題のための予備調査という性質を考えるならば、当時の本国と植民地の関係の状況をストレートに映し出している点で興味深い。同時に、第一次世界大戦という混乱期のあとの経済、社会をどのように立て直すかという課題について、植民地をどのように位置づけていくかというテーマも、ここから垣間見ることができる。

実際、クローデルの植民地をめぐる立場、考えが当時の政治情勢と微妙な軋轢を持っていた

⁴ クローデルの政治情勢に対する観察力はきわめて優れていて、説得力があるものの、ときに性善説的な見方が強いところがあり、たとえば日本が中国に進出することで中国は安定してよくなる、といった見解を述べることもある。

ことは、日本赴任から2年半後に起きた「クローデル大使更迭報道事件」が、明確に浮き彫りにしてくれる。これはまた、フランス本国の植民地に対するポジションの両極を示すものとして読むことができる。すなわち、1924年3月30日、突然に「クローデル大使解任」の報が流れ、後任にアルベール・サロー（Albert Sarraut, 1872-1962）の名が挙がるという事態が起こったのである。サローはジャーナリストから政界に転じた急進左派の人物で、オード県選出の議員となったあと、1911年から14年、16年から19年の二回にわたってフランス領インドシナ総督を務め、1920年には植民地相を命じられるという大物政治家だった。1933年と36年には、首相も務めている。この経歴からも分るように、サローは二度の総督時代や植民地相を経て、フランス領インドシナの入植者の利害に対して直接の関係をもち、また大変に発言力の強い存在だった。折しも、黒田清輝（1866-1924）の助力⁵を得たクローデルはインドシナ総督マルシャル・メルランの訪日を確実なものとし、その実現に向けて最後の調整を行っている最中だった⁶。

結局、これは誤報だったということで落ち着くのだが、第一報に触れたクローデルはすぐさま反応して、共和国大統領だったミルランに直に打電して異議申し立てを行うという、きわめて異例の対応をしている。ここには、明らかにサローが自分の後任となることに対する非常に強い反発が表れているが、こういった点から、フランス領インドシナ問題におけるクローデルとサローという対立軸を設定することによって、当時のフランス本国と植民地との関係に対するひとつの複雑な状況が浮かび上がってくる。日仏協約から日仏通商条約改締問題にかかわる国際関係の動きを、駐日大使クローデルの活動を軸にして詳細に検証している濱口学の指摘によれば、最終的には誤報だったにせよ、この報道はインドシナの現状と権益を守ることに重点を置いた「パリのインドシナ・ロビーは、サローをクローデルと交替させようとする動きまで見せ始めていた」⁷ ことの表れであり、その背後にはブリアン＝ベルトロ路線に繋がるクローデルが、極東における国際システム再編を構想しながらインドシナと日本間の問題を解決しようとしていたことに対する危機感があるという。つまり、メルランが直接に日本人と交渉を開始することで、今後インドシナの利益が日本の進出によって損なわれる事態が生じるのではないかという危機感を抱いた人々が、この流れを妨害するために主犯格のクローデルを更迭し、代わりに自分たちの利権を守ってくれるサローを駐日大使に据えようとしたと推測できる報道だったのである。

⁵ クローデルの懇請を受け、黒田清輝は印度支那協会を1922年に設立し、メルラン総督の来日に尽力した。その死去に際し、クローデルは弔辞を書いている。黒田の死去に関しては、Paul Claudel, *Correspondance diplomatique Tokyo, 1921-1927*, Gallimard, 1995, p. 282-284 を参照。

⁶ インドシナ総督の訪日は、モーリス・ロンとクローデルの間で話し合われた案件だったが、ロンが急死したために、その後を継いだメルランが日本に来ることになった。来日したのはこの報道の翌月の1924年5月で、メルランと同行したフランス領インドシナの経済界の中核にいた要人たちは、およそ一ヶ月かけて日本の政財界の重鎮と会合を重ねている。

⁷ 濱口学「クローデルと日仏通商条約改締交渉（六）」、『国学院法学』50-3、2012、p. 15.

とはいえ、サローもクローデルも、ともに植民地が本国に対して果たす役割の重要性を十分に理解しているという点では、同じ立場に立っていた。たとえばサローは、「フランスの各植民地の現状を個別かつ詳細に分析し、フランスの植民地制度をイギリス流のドミニオン（Dominion）に類似した制度へと発展させるための発想や原則を説いた」⁸ という点では、すでに引用したクローデルの「インドシナ旅行」の結びの部分の、「イギリスのドミニオンの役割を、極東や太平洋における政治情勢の中で、果たさなくてはならない」（「インドシナ旅行」 p. 344.）という指摘と同じ視点を持っている。また、サローはインドシナ総督時代に「植民地においても公教育の発展と国家の「民主主義的正義」をよりよく実現する必要を強調し、特に公衆衛生面における実績を挙げ交通網整備の努力を継続」⁹ したことで、フランス語教育や病院等の施設の充実を図った。こうした状況は、クローデルが「インドシナ旅行」の中で高く評価した点、すなわち現地人への医療ケアが十分に行われていることや、フランス語の普及に対する称賛と直接に繋がっているだろう。実際、サローが 1923 年に発表した『フランス領植民地の開発』（*La Mise en valeurs des colonies françaises*, 1923）の中では、「あらゆる点から見て、わたしたちの植民地の中でも最も重要で、最も発展していて、最も繁栄している」¹⁰ フランス領インドシナを扱った第三章で、「海港」、運河などの「水路」、「鉄道網」、「道路網」、「衛生」、「医療設備」、そして「教育」に関する項目が検討されているが¹¹、たしかにこれらに対するフランスの業績は一定の評価を得ていたもので、たとえば「フランスが印度支那に対して行つた諸種の政策の中には、私達も充分認めてやつていゝのは勿論ある。たとへば、鉄道の敷設や、病院の設立、大規模な土木工事や官吏の定収入額の確立、または土着民代表者会議の開設等」¹² といった指摘が、日本の研究書の中にも見つかる。あるいは、「既に第一次世界大戦前に始められた最も重要な事業の一つの端緒は、印度支那人女子に適当な教育を与える必要性を認識したことである」¹³ といった評価も見られる。これらはまさに、クローデルが「インドシナ旅行」で強調していたフランスの実績と、少なくとも表面上は合致している。

その上で、濱口学はふたりの姿勢の相違点に関して、「インドシナ植民地が具備する価値創出機能を本国に誘導する手段、インドシナに迫る最大の脅威、日本の排除を説くサローの議論には、日本を含む東アジアの国際経済通商関係を調整する中でインドシナ政策を策定しようとする国際的観点が欠落していた」¹⁴ とし、その「植民地開発構想は個別植民地の自律的単独的

⁸ 濱口学「クローデルと日仏通商条約改締交渉（五）」、『国学院法学』50-2、2012、p. 27.

⁹ 上掲書、p.26.

¹⁰ Albert Sarraut, *La Mise en valeurs des colonies françaises*, éditions Payot, Paris, 1923, p. 463.

¹¹ *Ibid.*, p.463-499.

¹² 片山眞吉『南方民族運動史』、モダン日本社、1942、p. 41-42.

¹³ T.E.エンニス（大岩誠訳）『印度支那一フランスの政策とその発展』、生活社、1941年、p. 249.

¹⁴ 濱口学「クローデルと日仏通商条約改締交渉（五）」、同掲書、p.32.

代化を目指し、国際的システム化の視点を欠落させていたので、クローデルの植民地開発構想と基本的齟齬を抱えていた¹⁵と指摘している。つまり、植民地の状況に最大限配慮しつつも、その自律性を保ちながら、それが本国に対して生み出す利益を確保するという観点に立つサローと、フランスの安全保障も含めたアジアの国際関係の中でフランス領インドシナを位置づけることでその立場を守り、かつ本国への貢献を図ろうとするクローデルとの間には基本的なスタンスの違いがあり、それはそのまま植民地に対する本国の方針の違いを浮き彫りにするものだったといえるだろう。インドシナがフランスの極東における外交政策にさらに緊密な協力を果たすことを提言した「インドシナ旅行」の結びは、そうしたクローデルの視点をはっきりと示したものだといえる。

4. むすびに代えて——詩人大使と植民地

植民地に対して、単に本国への経済的な貢献の手段と捉えるだけではなく、その国際関係の中における機能を考慮した役割を求めるというクローデルの姿勢は、駐日大使としての彼の日仏関係の構築活動の中にも生かされている。というよりも、二ヶ月のフランス領インドシナ滞在によって、クローデルはこの点の重要性を痛感し、自分に課せられた日本での使命に大きく反映させようとしたように思われる。そのひとつの結実は、東京の日仏会館設立後に、難色を示す本国を説得して、さらに京都に関西日仏学館を設立する道筋を立てたことに表れている。また当然のことながら、詩人大使の作品の中にも、そうした意識の痕跡を認めることができる——『繻子の靴』(*Le Soulier de satin*, 1924) は、日本滞在期に書き上げられたクローデル最大の戯曲である。16世紀後半のスペインを舞台として、「陽の沈まぬ国」の国王からアメリカ大陸の副王に任ぜられた騎士ドン・ロドリッグと魅惑の貴婦人ドニャ・プルエーズとの間の禁じられた恋を主軸として、第一日目から第四日目までの四幕の間に、およそ20年の歳月を背景としてヨーロッパから新大陸、アフリカ、さらに日本を巻き込んだ、壮大な「世界大演劇」が繰り広げられる。そこには、クローデル自身が経験した人妻との苦しみに満ちた恋愛が大きく反映されていると同時に、外交官として、カトリック信者として世界をどのように捉えるかという問題意識もまた、はっきりと投影されている。

その戯曲の最終幕で、アルマダ艦隊の敗北を知らされないまま、イギリスがスペインに屈した際にその支配をするように懇請されたロドリッグは、こう答えている。

ドン・ロドリッグ——戦いに敗れたこの民を、都合のいいように操作するという結構なお

¹⁵ 上掲書、p.33.

役目を果たす者、それがわたしというわけですね。／鞭打たれながら働く、日曜ごとに大人しく教会へ行って司祭さまのお説教を聞く、そして毎月、あなたのために、お金を袋に詰めて、それをあなたは毎年、マドリードの王様に送る、できるだけ少なくしてね。／あなたがわたしに、わが親愛なる住民諸氏にスペイン語で説明せよとおっしゃる使命とは、こういうものだ。／思い出すな、以前にわが友アルマグロが、やつ入植地でやっていたことを。〔中略〕馬をより上手に手中に収めるのは、どちらでしょうな、背中に跨り、両足の拍車で馬を刺す者か、あるいは手綱を引いて、思う存分に鞭を食らわす者か¹⁶。

こうして、この老残のコンキスタドールは、スペイン国王が差し出したイギリスの統治権を拒絶する。さらに彼は王に対して、アメリカ大陸におけるスペインの利権をイギリスに、さらに他のヨーロッパ諸国に開くようにと進言してその怒りを買ひ、奴隷へと身分を落とされる。こうして宮廷から追放され売られていく中、満天の星の下、彼ははじめて魂の自由と安らぎを感じるのだが、カトリックの精神に従って、地球というひとつの「美しい完璧な林檎」¹⁷を求めると宣言したロドリッグにとっては、国家同士の間での支配／被支配は、もはや固執すべき対象ではないという想いが、この戯曲の最後を貫いているように見える。外交官であったクローデルの現実の経験と考えがここにどこまで反映されているのかは、また細かな検証が求められるところだが、少なくとも、サローとの間の相違が開示してくれたクローデルの植民地に対する姿勢はそのまま、この『縞子の靴』の主人公の台詞や行動の中にも見出すことができるように思われる。つまり、ロドリッグがその名を挙げたディエゴ・デ・アルマグロ（1579-1638）——チリを「発見」し、ペルー征服に加わったことで歴史に名を遺したスペインのコンキスタドール——のようなやり方ではなく、クローデルの中には、他の国々との協調関係の中で、支配する地にも相互的に発展をもたらしたいという、より地球的な視点に立った想いが浮かんでいたのではないだろうか。

「インドシナ旅行」が全集に収められた際、クローデルは末尾に次のような註を書き添えている——「フランスによって不当に搾取された、あるひとつの国の姿を忠実に描いたこのタブローを、わたしは憂鬱な気分で読み返した。」（「インドシナ旅行」 p. 344.）——多数の植民地を有した第三共和国を代表するかつての辣腕外交官がこのように書くのは、第二次世界大戦が終わった後、1952年のことである。

付記 これは平成26年度専修大学中期研究員の研究成果の一部である。

¹⁶ Paul Claudel, *Le Soulier de satin, Théâtre II*, Gallimard, 2011, p. 492.

¹⁷ *Ibid.*, p. 506.